
絶賛逃走中！

A I R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶賛逃走中！

【Nコード】

N7526G

【作者名】

AIR

【あらすじ】

世界は一人の男によって転生した。その影響で進化する人類。それによって新たな争いが起こる。それにまき込まれたくない柚木朔。しかし世界の輪は彼を逃がさなかった。それどころか地球に別世界への門が現れる。果して彼は無事に生きていられるのか。

第1話 ただ今逃走中！

「ーああもう！俺が何かしましたかー！」

そろそろ一年の終りが近い12月20日。

街中で追いかけられながら叫び声を上げる柚木朔。叫んでいる間もドンドン速度を上げていく。

「待ちやがれ！くそっ！なんて速い逃げ足だ！」

その声に反応して追いかけてくる所謂不良と呼ばれる男たち。その数は六人もいる。

基本チキンな朔にはどう頑張っても勝てない数だ。其れが一人だとしても朔は戦わないだろうが。

そろそろ逃げ始めて五分ぐらい走り続けている。唯走って逃げるだけならまだまだ行けるだろうが、街中で人の波を走り抜けるのは厳しい。

人のいない裏道を探すために辺りをキョロキョロと見渡す。そして直ぐに裏道を発見して其処に逃げ込む。その一連の動作には、悲しいぐらいの慣れを感じる。

後ろから聞こえてくる声でまだ追って来るのを感じる朔。其れを引き離すために落ちている生ゴミなどを気にせず更に加速する。ドンドン距離が開いて行きこのまま逃げ切れと思った朔。しかし今し方通り過ぎた分かれ道から、

「っは！逃げれると思うなよ！」

罵声を朔に向けて上げながら新たな男が追いかけてくる。

「この逃げる事に慣れた俺が簡単に捕まるか！」

其れにきずいた朔は自覚なく悲しい言葉をはく。急に出てきた男もあまりに自然にその言葉が出てくることに若干同情する。朔は相手に同情されている事も知らずに後ろを振り向き、目の前に有った生ゴミの入ったごみ箱を新たに出てきた男に向けてけり上げる。

バコツ！鈍い音をたてながら少し浮いて男に向かって飛んで行く。其れに反応して男はごみ箱を蹴りつける。

「俺を今までの奴と一緒にするなよ！」

朔は自慢げに言う男を見て笑いだす。男は朔がなぜ笑っているのか気になって怒鳴りつける。

「何が可笑しい！ごみ箱を蹴り返したんだぞ少しは驚け！」

「はははは・・・だってお前のセリフ・・・まんま遣られキャラじやん。しかも上見てみ」

男はゆっくり上を向く。上を向いて直ぐにぐちゃ！と男の顔一杯に生ゴミが付着する。それを見て爆笑しながら挑発をする朔。

「はははっ！ゲホゲホはあはあ・・・お前ホント今までの奴と違うな。だって・・・あんなに自信満々にやってゴミかぶるとかな。プツククク！良くあんな言葉を言う奴は居るけどさ、其処までのはレアだぜ？」

男は体をプルプル震わせながら顔を上げる。その顔は怒りで真っ赤に染まり今にも噴火しそうだった。朔はその顔にきずき思わず展開が予想でき、逃げ出す準備を始める。案の定男は朔の予想道理の動きを見せる。

「ぶっ殺す!!」

男の殺意と共に体の周りに炎が舞い上がる。朔は逃げる体勢に入りながら敬語で話しかける。

「あのおゝつかぬ事をお尋ねしますが、能力者さんですか？」

其れを訪ねた瞬間、朔の言葉の返事代りに炎が目の前を通る。その奥で男はいい笑顔で朔に笑いかける。其れを見て朔は後ろに向かつて謝りながらスタートを切る。

「す、すいませんでしたゝ！ゆ、許して下さいゝ！」

朔は両手を上げて土もないのに土煙を上げながら走りだす。その姿は正にしつばを巻いて逃げると言う言葉があてはまるだろう。其れを見ていた男も余りの逃げっぷりに怒りを忘れ啞然と見送ってしまった。その間も朔は距離を稼ぎ曲がり角でドリフトを決めて（どうやってしているのか疑問だが）消えていく。

「……っは！やべー余りの逃げっぷりに逃がしちゃった!!」

と男が其れにきずいた時は既にあのワザとらしい土煙一つ上がってはいなかった。

第1話 ただ今逃走中！（後書き）

前の小説を書き直そうと思いましたが書き直すより新たな小説を書いて腕を磨く事にしました。下手かも知れませんがよろしくお願いします。

第2話 思考は過去に逃走中！ 前編

男から逃げ出してからかれこれ10分ほど街を走り続けてるが全く疲れた様子を見せない朔。しかし男が追って来ている可能性有るのでまだまだ走り続ける。

追って来ている男が普通の男なら朔もとくに安心して歩いているだろう。しかし彼は能力者だった。これが朔が生まれるよりも30年前なら能力者などは居なかっただろう。

そもそも能力者はファンタジーの世界にしか存在しなかったのだ。そのファンタジーにしか居なかった者が出て来たのはおよそ30年前に起きた大爆発が原因だった。

その事件はある冬にある男が作った一つのスイッチから始まった。男の名前は”本間 燕”。

彼はスイッチを作って直ぐに世界中のあらゆるメディアを一時的に則った。そして世界に向けて彼はその国々の言葉に変換して宣言する。

「世界のスイッチを作った」

と。其れは何処にでも有りそうな小さなスイッチだった。聞いていた人達はその映像を見て馬鹿にするように笑うか無視した。しかし笑っていた人達も無視していた人たちも次の言葉に動きが止まる。

「これは世界中の核爆弾や原子力発電など原子力に関係する物全ての起動スイッチになっている」

その言葉に世界中の人々が騒ぎ始める。どうせ嘘だとまた馬鹿にするものも居れば其れが本当だった時を想像して大騒ぎする者など人々は其々騒ぎ出す。しかしそれを無視するかのように彼は淡々と話を続ける。

「私はこれを一ヶ月後に押す。一ヶ月後の12月24日午前0時0分に世界中の原子力に関係する物を爆発させる。もし其れを防ぎたいならその日までに南極と北極に集める。それをしたなら助けてやる。」

そう言つて映像は途切れる。世界中の国々はすぐに代表を集め話し合いを始めた。嘘かもしれない。しかし本当だったらどうなるかは明らかだった。話し合いは一週間の間ずっと行われた。その結果世界は彼の言つたとうり南極と北極に爆弾などを運ぶしか無かった。

全てを運ぶのに二週間かかりその間も世界中の国々で彼を指名手配して探し続けたが見つからなかった。その結果人々は残つた一週間を使って出来るだけ高い場所に避難したり、安心感を得るために地下シェルタに避難したり出来るだけ安全な場所を探した。

そして一ヶ月後の12月24日遂にその日は来た。彼は再びテレビの画面に出てきた。世界中で彼を探したが影も形も見つから無かつたのに彼は簡単に目の前に現れた。彼は前と同じように喋り出す。

第3話 思考は過去に逃走中！ 後編

「間もなく12月24日午前0時0分になろうとしている。準備は良いか？」

小さなスイッチを手の上に乗せて喋り出す。ホントに小さな物だった。しかしそのスイッチが起動させるもの世界中のどんな物よりも重かった。残り時間が一分になった時に彼は楽しそうに提案する。

「残り一分だ。如何する？カウントダウンでもするか？」

彼は残り時間を見ながら顔を満面の笑顔にして本当に楽しそうに提案した。人々はそれを聞いて怒りだが、その声は向こう側には届かない。残り十秒になって彼はスイッチに指を乗せ言ったとおり力ウントダウンを始める。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・
3・・・2・・・1・・・0！！」

カチッ。拍子抜けするぐらい小さな音しかしそれを押してから直ぐに映像が切り替わり代わりに氷の世界が映る。しかしそれは直ぐに轟音と閃光で支配される。

誰かが小さな声で言う。ホントにやりやがった・・・。

人々が啞然とそれを見ている間も彼は話し続ける。

「ははははははは！！どうだ綺麗だろう！普通なら地球が滅亡するかもしれない。だが安心しろ私の目的とそれは全く関係ない。その証拠に大規模な地震や津波など起こっていないだろう？」

彼の言ったとおり地震や津波は起こっていなかった。それを聞いて少ない数だが冷静だった人達が考える。ならばその力は何処に行ったのかと。そしてそれを今の技術で操作できるのか？

あいての考えを読んだ画面の向こうの彼はそれは楽しそうに喋り出す。

「本当か気になるか？そうだな。面白い物を見てやる」

そしてまた映像が変わる。その映像に映っていたのは地球だった。しかしその地球の丁度北極と南極の部分に大きな光の柱があった。

「どうだ凄いだろう？この光は爆発させて集めたエネルギーだ」

あれがエネルギー？いったいどうやってこれ程のエネルギーを操作している！世界中の科学者が疑問を上げる。それを彼は笑いながら、

「考えても無駄だ。これはお前達の技術とは異なる物だ。それにそろそろ時間のようだしな。そうだな最後に私の目的を教えよう。私の目的は膨大なエネルギーを使った地球のリインカネーションこの世界の転生だ。これを行う事によって我々人類と世界は生まれ変わる。恐らく世界には科学を超える力が新たに生まれるだろう。だがそれより私は着目しているのは地球のリインカネーションによって生まれる新人類だ。それが何なのか語りたいところだがもう時間のようだ。では新しい世界で会おう！！」

その言葉を最後に世界は生まれ変わった。彼の言ったとおり新たな世界とそこに生まれた新人類の能力者と様々な謎を残して。

まあ此処まで語っという何だけどそれ前の俺なんだよね。

あの後世界を改変してすぐに僕は自分も改変したこれから生まれるであろう能力者に。ただその時地球のリインカネーションしてたせいで僕のが追加された。その能力はリインカネーション。何と言いか輪廻の輪に捕まっちゃったんだよね。しかもその時の能力の影響で寿命が激減してすぐに死んじゃったし。まあそのせいで能力が解って新たな人生を過ごしているんだけどね。

まあ今は逃げるか。

第4話 あらゆる手で逃走中！

そろそろ逃げ始めてから30分。体は全く疲れていないがそろそろ大丈夫ではないかと後ろを振り向く。

「も、もう追って来て無いよな？」

朔はびりながらゆっくり後ろを確認する。そして体を出来るだけ小さくしてから小さな声で、

「もしもし。居ますか。．．．．．ふう。いないな！いないよな！よし！よし！よし！逃げ切った！」

その場で両手を思いっきり空に向けて高く上げながら喜ぶ朔。周りの人の目が厳しい物になっているがそれを気にせず全力で喜びを表現する。

しかし朔はその行動によって思いっきり街中で目立っていた。バシッ！！朔は後ろから力強く肩を掴まれる。

「い、いつてー！！お前行き成り俺になにする．．．．．んですか？」

肩を思いっきり掴まれた痛みで怒りながら振り向く先に居たのは、先ほど朔を追っていた能力者を除く不良六人だった。怒っていた朔も言葉の途中から直ぐに敬語に無理やり変更して尋ねる。

その朔に対して目の前に居るうちの一人の男が答えてくれた。

「何ちよつと一緒に遊びに行かないか？」

親指で路地裏を指しながら男が笑顔で言ってくる。唯のその頭にはきれいな青筋がくつきりと浮かんでいた。その後ろに居る男たちも指先で何かを確認するかのようにポケットに手を入れて笑いかけてくる。

それを確認した朔は如何にも申し訳なさそうな顔をして、

「すみません。これから予定がありましてですね？出来ればまた今度にしては頂けませんか？」

喋りながらゆっくり男の手を指一本一本はずしながら答える。しかし朔を追いかけて来た男たちがこれで逃がす訳がない。

「何安心しろ。すぐ終わる」

今度は両手で確り朔の肩を掴んで目を見ながら言う。

外そうと思えば外せるが、この用に囲まれている状況で逃げるのは難しい。逃げる方法をその頭で考え続けた朔は一つだけ浮かんだ捨て身の策を使う他に選択肢が無かった。

覚悟を決めた朔は大きく息を吸い込んでから周りを歩いている人々にも聞こえるくらいの声で喋り出す。

「すみません！！僕は女の子が好きでして、男のあなたからの告白には答えられません！！」

その声は以外に響き周りを歩いている人々もつい動きを停止して朔と男に視線を向ける。その場の中心の二人は朔の方は中学生にしては幼く中性的な印象があるだけで無く声変りもまだのようだ。もう一人の男は如何にも不良していますと言った感じの顔であり、しかもその両手はがっちり朔の両肩を掴んでいた。何と言つか有罪だった。

朔の目の前に居る男とその仲間もその言葉に動きを停止する。朔はその内に言葉を続ける。

「あのくすいません？」

朔はこっそり目薬を目にさして悲しそうに見る。

「・・・あ、ああ。何だ？」

その眼差しに何もしていないのに罪悪感とそれを見ている人達の視線が痛い男は取り合えず言葉を返す。それを好機と見た朔はすかさず言葉を続ける。

「出来れば僕の肩に置いた手を放して欲しいんですが」

「あ、ああ」

男は特に何も考えず朔の言葉に従い肩から手を放す。その後すぐに朔は一步後退して距離を開ける。そして申し訳なさそうに男たちに話しかける。

「す、すいません。予定が有るのでそろそろ失礼さしてもらいます」

男達も丁寧と言われ思わず、

「あ、ああ。時間を取らして悪かったな」

「いえいえ。ではサヨナラです!!」

そう言つて朔は演技を止め一気に後ろに向けて走り出す。その時ワザと目薬を落とす事も忘れない。

その展開について行けず立ったまま少しの間動きを停止する男達とギャラリーの人々。この中でただ一つ言える事はきずいた時はもう遅いだろうと言う事だけだろう。

第5話 出会った彼女も逃走中！ 前編

あの後男達から逃げ切り、また何か起こらないうちに家に帰ることにした朔は出来るだけ人が多い所を選んで帰路に就く。しかし何かに呪われているのか家に近づけば近づくほど先ほどの男達が居た。朔はその度に回り道をして気づいたらあの能力者に追われていた。

「やっと見つけたぜ！！いい加減諦めな！！」

男はあの後も探し続けていたのだろう。とても疲れた顔で実に喜んでた。そんな相手に捕まったらどうなるか解りたくも無いのに解ってしまった朔はまた逃げ出す。しかし

もう相手の男に油断は期待できないだろう。なにせあそこまで馬鹿にして逃げて来たのだ。その怒りを利用する事もばれてしまっている。

そして何より危ないのが男が普通に能力を使っていることだ。現に今も男が腕を振り上げて、

「焼き尽くせ！！」

と朔に向けて炎を打ち出す。

それ自体は簡単に避けられて怖くないのだが、その炎が当たった壁が溶けて飛び散ったり、炎が通り過ぎるときの熱量で服などが燃えないかと注意する。朔が裏路地に逃げ込まなければ怪我人が出るどころか世界機関の日蝕や月蝕が出てくる可能性もある。もしそんなのが出てくれば本間燕の記憶を持つ朔も危ない。それも考慮した上で彼は裏路地に逃げたのだ。

そんな事を考えながら逃げていた朔は次の曲がり角を曲がってすぐに目の前の光景を見て思わず走るのを止めた。

そこに居たのは、上から下まで真っ黒な服装で固めた男か女かも分からない人が5人と朔と同じくらいの年齢の真っ赤な髪とその姿に似合わないはずの両目を塞ぐ眼帯が妙に似合う女の子だった。

それを見た朔は思わず目の前にあるごみ箱の後ろに身を隠す。その人達は朔から見て関わってはいけない感じが滅茶苦茶していたのだ。そんな彼女たちは近くに居る朔に気付かず話していた。

「それを返して貰おうか。どうせ君には使えないだろう？」

その声から男と思われる人物が女の子の手の上にある小さな箱を指さし話しかける。しかし女の子もその言葉に敵意をこめて言葉を返す。

「返す訳無いでしょうが！！何の為に盗ったと思ってるのよ！！」

しかし男もその反応を予想していたようで彼女に向けて宣告する。

「残念だ。君の能力は得難い物なのだから出来れば此方について欲しかったが仕方ないなら・・・その腕ごと貰おうか！！」

お互いにその言葉と共に静かに戦闘態勢に入る。本当ならこのまま戦っていたのだろうだがそこにイレギュラーが入る。

「何だ急に止まって？もう観念したのか？」

朔を追いかけていた男の声が静かなこの場に妙に響く。朔はごみ箱で見えないが彼は丸見えでそれに向けて真っ黒な男達がナイフを投げつける。しかしそのナイフは彼に辿り着く前に炎によって燃え尽きる。

「お前誰に向けて攻撃しやがる！！」

彼は朔から視線を外しナイフを投げて来た男達を睨み付ける。そしてその後すぐに走って男達に近づき殴りつける。男はそれを防いだ。が炎で真っ黒な服を焼かれる。その下に着ていた服に見覚えの有った朔は隠れているのを忘れて思わず立って叫ぶ。

「げ、月蝕！！何であんた達みたいなのがこんな所に居るんだ！まさか通報されていたのか」

第6話 出会った彼女も逃走中！ 後編

その叫び声を聞いた月蝕のうち一人だけが朔に向かって来る。恐らく能力者と女の子の方が優先順位が高いのだろう。

しかし朔もそう簡単にはやられない。朔は隠れていたごみ箱の蓋を敵に向けて投げつける。しかし目の前の男もそれを簡単に避ける。でもそれは朔にとっては予定道理だった。朔は避けた敵に対してすぐさまごみ箱を顔の高さぐらいに蹴り上げる。そしてその勢いで中のゴミが降り注ぐ間に男に向けて体当たりをする。

ドンツッ！予想より大きな音と共に男は吹き飛ぶ。しかしそんな音に驚いている時間は朔にはない。すぐさま近づきそのまま蹴り上げその上からもう一度蹴り落とす。この技こそ朔が受け継いだ本間燕の記憶を元に訓練した結果の一部である。

「ごめんね。でもあんまり見た目で判断しちゃ駄目だ、よ！！」

しかもちゃんと男の顎を蹴り止めを刺す。その一撃で戦っていた男は顔を横に向け気絶する。

予想外の強敵に一瞬動きが止まる月蝕の男達。その隙に眼帯の女の子と能力者の男が攻撃する。

「っは！！！」

「燃えちまいな！！！」

女の子は目の前の男のみぞうちに拳を叩きこみ、能力者は炎を弾丸のように撃ち出し敵を吹き飛ばす。そして吹き飛んできた敵の場所

を読んでいた朔が蹴り落とし止めを刺す。五人いた敵はあつという間にリーダー格の男一人になった。だが男はそれを見て逆に嬉しそに笑っている。

何故笑っているのかは解らないが朔から見てもこの男は先程までの奴らとは全然レベルが違う。それが解っている朔と女の子は迂闊に攻撃できないが、もう一人の能力者の男はそれに気付かず攻撃する。

「お前も燃えちまえ!!」

彼が放った炎は先ほどと違い一発に威力を凝縮した一撃だった。これが当たれば簡単に男は死ぬだろう。しかしその一撃は男に当たる前に別の炎にかき消される。その炎は彼が放った炎のように赤いが違う。その炎は紅い。紅蓮と言ってもいいぐらいの力強さが有るのだ。

恐らくそれを放ったであろう男が喋り出す。

「君の炎は小さいな少年。炎と言うのは生き物だよ。如何にして空気中の気体を上手く取り込むかで炎の色や熱量それに密度が変わる。君のは私から見たら唯の火遊びだ」

能力者の男はその言葉にキレて殴りかかる。しかしそれすら彼には当たらない。それどころか、

「ふんっ!!」

「っがあ・・・」

拳一発で気絶させられる。そして今度は残った二人に視線を向ける。

(やばい!!やばい!!このままじゃやられる)

そう考えた朔は少しでも情報を引きだそうとする。

「貴方強いですね。何と言うお名前ですか?ついでに僕は柚木朔と言います」

行き成り名前を聞いてきた朔に面白そうな顔をして喋り出す。

「君は良いね。この状況でも冷静だ。必死に此处から助かる方法を考えようとしている。才能があるよ君にはね。あと名前だったね私の名前は橘緋影^{たちばなひかげ}。月蝕では二つ名紅蓮奏者を貰っているよ」

第7話 箱を使って交渉中！

最悪だった。よりによって二つ名もちとは朔は考えたくもなかった。しかし考える時間を稼ぐため会話を続ける。

「それで何で二つ名を貰うほどの貴方が彼女を狙っているんですか？後何で僕まで襲われているんですか？」

流石に答えてくれるか微妙だったが特に会話にする物が無いので質問する。

「何彼女が私達からその箱を奪ってくれてね。それを返して貰いたいだけさ。それと君を襲う理由は見られたら困る物だね。逃がす訳にはいかないんだよね」

そう彼女の持っている箱を指さしながら橘は言う。指さされた彼女はその箱を背中に隠すように持つて行く。

しかしその箱にたいした価値を見いだせない朔は男に問いかける。

「ならこの箱をそちらに渡せば逃がしてくれますか？」

「っ！駄目に決まってるでしょ！！」

それを隣で聞いていた彼女は直ぐに朔に向けて掴みかかる。しかし朔は彼女を見ながら冷静に問いかける。

「なら貴女は橘さんに勝てるんですか？あの月蝕で二つ名を持っている人に勝てるか？」

「そ、それは……無理です」

彼女はそれを正直に答える。朔は続けて彼女に話しかける。

「いいですか？死んだら如何にもならないんですよ！！此処でその箱を渡せば命は助かるかも知れないですよ！！箱なんてまた盗めば良いじゃないですか！！」

「そ、そうだよー！死んだら如何にもならないもんね！！それにまた盗めばいいんだよね」

堂々とそれを返してもまた盗むと言っている。黙って見ていた橘も朔達を苦笑いしながら見ている。その間も着々と洗脳と言う名の説得を受けた彼女は、

「分かったこれ返すよ！！」

とついには笑顔で言っていた。しかも何故かそれを朔にさし出す。橘も朔が盗んで帰るという事は考えていないのでそのまま見ている。しかしそれに朔が触れた瞬間箱が光り出し、

「輪廻の輪を確認。記憶の確認中………本間燕と一部一致。本間燕本人と認定。よろしくMy Master」

そこに一本の刀が出てくる。その光景に動きを止める三人。しかし直ぐに橘が朔に問いかける。

「君は……本間燕なのか？いやそれが開いたという事はそうなん

だろうね」

啞然とした様子で朔に話しかける橘。隣に居る女の子も朔を見ている。

一方朔は目の前にある一本の刀に魅せられた。それは木彫りの鞘に刀と言うには大きすぎるそれはむしろ野太刀に部類されるだろうがそれにしても大きすぎる。しかしそれは刀だと朔は理解する。そして朔は恐る恐るその刀に手を伸ばす。そしてそれを掴む。

手にとって分かるこれは自分の刀だと。二メートルは有るその刀は妙に手に馴染む。そしてその柄は何の飾りつけもない唯の木だったがその飾りつけのなさがより良いと思える。

暫くそれに見とれていると行き成り炎が襲いかかる。しかもそれは気絶していた男から放たれた。朔は迷わず刀を抜き放つ。本来素人だと抜くのにかかるどころか抜けないであろうそれはあまりに自然にそして速かった。そしてそのまま刀で炎を切り掛る。すると炎は綺麗に二つに裂ける。それを見た男は、

「な、何なんだよ！！お前まで俺を馬鹿にするのか！！お前は俺より弱いんだろ！！」

その光景に混乱する。

第8話 炎剣相手に戦闘中！

その様子を見て助けようと動き出す女の子。しかしそれを橘が止める。

「少し待っててくれないか？もし彼が本間燕の記憶を持っているならあの程度には負けないよ」

それに対して言い返そうとしたが彼女自身も気になっているので黙っている。

二人がそんな会話をしている事も知らずに朔は男と戦う。

男が遠距離で炎を打ち出してくるのを時によけ、時に切り払いながら少し少し接近する。段々近づいてくる朔に恐怖しながら男は先ほど言われた事を思い出す。

（炎は生き物、空気中の気体を上手く取り込む、か）

そう言われた事を思い出した男は朔に勝つために実行する。空気中の酸素を意識しその供給量を爆発的に増大させる。その変化を感じた同じ炎使いの橘は、

「あの少年は先ほど言った事を実行しているのか？しかしそれは簡単にできる事じゃ無い。恐らく失敗するだろうな」

そんな事は知らない男はその炎を目の前に出す。その炎は先ほどと違い揺らぐことなく真っ直ぐに伸びている。これに触れるのは危な

いと感じた朔はすぐさま一度距離をとる。

距離をとった朔にその炎を撃ち出そうとするが撃ち出した瞬間それは全然違う方向に飛んで行く。それを見ていた橘はやはりといった顔で、

「やはり無理、か。しかし行き成りそれを出せるだけでも凄いな」と男を少し褒める。

しかしそれをした男はまだ諦めていなかった。先ほどと同じ様に炎を手に出し、そしてそれを思いつきり掴んだ。

橘は驚いた様子で、

「やるな。先ほど手に持っている時はコントロールできていた事を利用したか」

そのまま朔に近づきそれで剣の様に朔に切りかかる。それに驚いた朔は刀で防ごうと前に出す。しかしそれは失敗だった。炎が刀に当たった瞬間、簡単にすり抜ける。そう炎とは気体の燃焼によって起きるのだ。当然その形に決まりは無い。

「危ない!!」

女の子が叫び声の様に朔に声をかける。その声で咄嗟に朔は男の右手を蹴り上げる。

「っは!!」

ツパン！！と言う音が鳴り男は痛みで後ろに下がる。

「つくそが！！」

しかし再び接近して切りかかる。それに対して朔は対応策を考える。

（このままじゃ勝てないな。でもいったい如何するか？）

刀を確り握りその感触で集中状態に入る。そしてその時、

（何じゃそんな奴にも勝てんのか？それで燕の記憶を持つ者か！！）

急に朔の頭の中に走る声。それに混乱した朔は考える。

（何だ今の声は！それに俺以外に聞こえて無い様だし）

（考えている場合か！しかたない手本を見してやるか）

その声が聞こえた瞬間体が動かせなくなる。

しかしそんな事を知らない男は切りかかる。

ツキン！！まるで金属同士が当たった様な音が響く。それを啞然と見ている四人。特に朔は先程まですり抜けていたのに考える。

（如何してだ。如何して今回は大丈夫だった）

（そんなの決まっているじゃろくに、唯主が我を使いこなせぬだけの事。まあ見ているが良
い）

そう声が響いた瞬間朔の体が完全に乗っ取られる。そしてその声の持ち主は朔の体で、

「久々の体じゃ。準備運動ぐらいにはなって欲しい物よ」

堂々とそんな事を言う。

第8話 炎剣相手に戦闘中！（後書き）

題名を変えたいと思うのですが、良ければ何か良い題名があったら書き込んで下さい。

第9話 知らない人が戦闘中！

ツキン！先ほどと同じように金属の衝突の様な音を出す。しかしぶつかっているのは刀と質量の無い炎の剣であり本来ならあり得ない音だ。

朔？と戦っている男はぶつかる度に段々恐怖する。何故こいつは俺の炎を刀なんかで防げるのかと。

朔？はその表情を見て小さな声で言う。

「久しぶりの戦いがこの程度か」

それはホントに小さな声だった。しかしずっと剣をぶつけ合うほどの距離に居た男には聞こえていた。

それが耳に入った瞬間男は怒りで動きを止める。しかしその間も朔？は攻撃をしないどころかニヤニヤした顔で見ている。それを見てより馬鹿にされたと思った男は簡単にキレル。

「クソがー！！テメー俺をなめんじゃねー！！」

それを見た朔はさらに挑発する。

「全く最近の若いもんは」

男にこれ以上我慢は無理だった。掌に固めていた炎のコントロールを失い炎は三百六十度あらゆる方向に飛んで行く。朔？は勿論の事見学していた二人にも炎は襲いかかる。しかし見学していた二人は

驚きはしたが、

「っは!!」

「っふ!!」

簡単に女の子は拳で炎をかき消し橘は手を振り払っただけで飛散させる。そして朔？は、

「つまらん。先ほどよりつまらん。もう良い帰るが良い」

そう言って刀を一度鞘に戻してから、

「主如きには勿体無いが手本を見せると言ったのでな」

腰を低く落とし居合の体勢になる。それをチャンスと思った男は刀の届かない距離から炎を連発する。これに対して全く避ける動作をしない朔？に勝ったと思う男。

しかしその瞬間朔？は聞こえないぐらい小さな声で、

「・・・流居合瞬き」

その瞬間朔？の手が霞む。周りの炎は全て飛散しそれを放った男の体から、プシュ！と血が流れる。男は自分の体を見ながら、

「な、何で！？俺は確かに届かない距離に居たはずだ!!」

自分の理解できない事に混乱しながら自分の血を見続ける。確かに男から朔の距離は十メートル程あり刀は届かない。

それに朔？はつまならそうに答える。

「ただ斬っただけの事よ」

斬ったそれは自分の出血している場所を見て理解していた。しかし納得いかない。

「だから俺はお前の刀から距離をとったんだ！！なのに如何して！？」

男は血だらけな格好で怒鳴る。朔？はいい加減めんどくさそうにそれに対して説明する。

「誰が斬撃は飛ばぬと言ったか。まあ今回は殆どカマイタチと言つて良いがな」

それを信じられない顔で見ながら男はまた気絶する。

第10話 お互い名乗り合い会話中！

男を倒したがまだ物足りない朔？。今度は橘の方を向いて話しかける。

「如何じゃ？今度はお主が戦わぬか？」

刀の切っ先を橘に向けニヤリと笑いながら尋ねる。だが体は朔の物であり怪我したら痛いのは自分なのだ。なので朔は待ったをかける。

（ち、ちょっと待ってよ！！これは俺の体なんだよ！！もし怪我したらどうするのさ！！）

（煩いの。安心せい怪我一つせんよ）

朔を安心させる様に自信にあふれた声で朔に語りかけてくる。しかし会った？ばかりの人？を信用できるほど朔は単純でない。

（そんな事言っただってあの人すごく強いんだよ！それを怪我一つ無しでなんて無理だよ！）

（ええい！！見ておれと言っているじゃろうが！！）

（だから！無、）

（ちょっとだまっとれ！！）

（はい）

ある種の恐怖心で静かになった朔から意識を目の前の橘に戻す。

意識を戻してすぐその間考えていた橘が丁度答える。

「良いですよ。戦いましょうか」

朔に近づきながら橘はあえてそれに答える。まだ朔？の実力が解らないからだ。

唯その前に聞く事が有った。

「戦うのは良いですが、その前にお名前を聞いても良いですか？」

まだ橘は目の前の朔になっている者の名前を知らないのだ。基本橘は自分より強い者の名前を聞いてから戦う事を心情としている。自分が負けた相手を一人一人覚えて次に戦う時に生かすためだ。

朔？は少し考えながら橘に話しかける。

「すまんが今代はまだ名が無くての。刹とでも呼んでくれんか？」

刹と名乗った者は申し訳なさそうに言ってくる。橘はそれを気にせず笑顔で、

「なら暫く刹と呼ばしてもらいます」

刹もその顔に笑顔を浮かべ、

「うむ。暫くはそれで頼むぞー！」

少し偉そうに言う。橘はそんな事を一々気にしない性格なのだが少し苦笑いしてしまう。

そんな空気を破る様に刹が話しかける。

「ではそろそろ試合つかの？」

二メートルの刀を腰に構えまた居合の体勢になる。

対する橘も反身で右手を前に出し左手を顔の横に持ってくるボクシングのような構えをとりながら、

「そうですね。余り時間をかけると人が集まります。始めましょうか」

静かな空気が流れその中でお互いは改めて名乗り出る。

「世界機関月蝕第二番隊炎所屬紅蓮奏者の橘緋影」

「輪廻伝える剣。長剣の神霊刹」

張りつめた空気の中、最後にお互い同時に、

「「参る!!」」

第11話 剣対拳で戦闘中！ 前編

右足で地面を思いっきり蹴り居合の体勢のまま飛び出す刹。それに対峙する橘も前に駆け出す。

そのまま二人の距離が残り二メートル程になった時橘が先に仕掛ける。

お互いの丁度真ん中の空間に紅蓮の炎が突如出現する。刹はそれを空中に浮いたまま斬り払おうとするが、ツキン！！と炎をでは無くまるで金属の衝突の様な音が鳴り響く。

見た目は先程よりも真つ赤なだけだが、その炎は先程までのとはレベルが全く違うのだ。よって先ほどより少し力を入れた位では逆に刀が打ち負ける。

しかし刹もこのまま炎に突っ込む訳にはいかない。刀が当たって直ぐにその反動を利用して後ろに戻り刀を鞘に戻す。その後すぐに飛び出し先ほどと同じように小さな声で、

「・・・流居合瞬き」

その瞬間またも刹の手が霞むと同時に一瞬で炎が飛散する。だがその直ぐ後ろで橘が次の攻撃を放っていた。しかしそれは刹が確認する前に飛散する。

それには橘も驚く。まさか何もせずに消されるとは思っていなかったのだ。

だが驚いている時間はそこまで無い。何故ならすでに目の前に攻撃の体勢に入った刹が居るのだ。

恐らく接近戦では橘に勝ち目は無いだろう。しかしこのまま後ろに引いたとして直ぐに追いつかれる。そこであえて橘は接近戦を刹に挑む。

一歩前に踏み出し其の場でフットワークをとる。それを面白そうに見ながら刹は斬りかかる。ツピユ！！風の斬る音も殆ど聞こえない速度で刀が橘に襲いかかる。

それを橘は相手の懐に潜り込むことで避けるだけでなく刹の右の脇腹にリバーブローを叩きこむ。しかしそれは刹の持っていた鞘で防がれる。だが拳に籠った勢いはそのまま刹に襲いかかるハズだった。それすら刹は自分の力に変換する。

刹は防いだ勢いそのまま回転し鞘で橘に殴りかかる。橘もそれを防ぐため左のジャブを高速で五発放ち威力を少しづつ削いでいく。それによって腹に当たりはしたが殆どダメージは無い。

しかし橘は鞘が体に当たるのだけは防ぐべきだった。刹は鞘が当たって直ぐ刀を思いつきり鞘に戻しそれにより生まれる衝撃を橘の腹に打ち込む。ツガ！！と言う音で橘の腹に鞘が深く食い込む。思わずその威力に橘は、

（ツグ！！不覚！！まさかそんな方法を取るとは！！）

自分のミスを後悔する。しかしまだ戦っている途中だと直ぐに反撃する。

刹に向けジャブを連打する。それを刹は簡単に防ぐが何発か防いでいた時、ズキリと手に衝撃が走る。それは橘がジャブを咄にして刀に向けてアッパーを使って打ち上げたのだ。

刹のボディが一瞬から空きになる。そこに橘は自分が持つ技の中で絶対の自信を持つパンチを打ち込む。右肩と肘と手首を同時に回転させ刹の腹に向けコーク・スクリューブロー放つ。

第12話 剣対拳で戦闘中！ 後編

目の前の男が放つパンチを確認し笑いながらそれを眺める刹。だが朔はそれを黙って見逃す訳にはいかない。

（笑ってないで如何にかしてよ！！）

（おっと！そうじゃったそうじゃった！！こ奴が中々やるからつい喰らってやろうとおもったは）

喋りながらも刹は直ぐに行動に移す。

蹴り上げられた刀をそのまま地面に刺しそれを起点にバク転をする。その過程でついと言わんばかりに橘の右手首を思いつき蹴る。橘は蹴られた痛みを無視してそのまま刹に攻撃するが、刹がバク転したせいで届かない。

それどころか今度は橘が隙だらけになり刹が直ぐに刀を構え振りぬく。が橘は残った左手に炎を纏わせ又もジャブで弾く。

そしてお互いに距離を取る。

「やるの。中々の腕じゃ」

五メートル程先で、刹が片目を閉じながら橘に話しかける。

「うむ！ならそろそろ少し本気を出すかの？」

ゾツとした。橘は悪寒を覚え反射的に距離を取るが体が理解する、

此処はまだ攻撃範囲だと。だがすでに時間はない。

「安心せい。怪我は残さんよ」

最後に橋に話しかけ刀に手を伸ばす。

そしてチン、という音が聞こえ気づいた時には橋は直感に任せ横に飛んでいた。その横を風が通り過ぎ後ろの建物が傾く。その断面は鏡の様に反射する位綺麗に斬れている。

その断面を見てホントに怪我をしないのか疑う橋。しかし目の前の刹は既に次の攻撃体勢に入っている。

橋は急いで炎を発現させる。恐らくこの炎ではあの斬撃を防げないだろう。しかし斬撃の通り道さえ分かればいい橋は炎を無数に配置する。

またチン、と言う音が聞こえる。そして直ぐ橋の目の前の炎が弾け橋は直ぐに横に飛ぶ。今度はそれを確認できた。出来たがそれは解つていても簡単に避けれる速度では無かった。

一方刹も橋が二回連続で避けたことに笑みを深くする。

「まさか二回も避けられるとはの。中々に頑張る」

先ほどから一步も動いていない刹は橋に向け話しかけながら構えを変える。

「では瞬き以外の技を見てやるっ」

刀を逆手に持ち左手で鞘を持つ。その状態で技を放つ。

「・・・流逆手」

体を回転しながら三度斬撃を橘に飛ばす。それは一発一発の速度が違い尚且つ撃つ角度が違った。その三つの斬撃はぶつかり合い拡散する。その攻撃は先ほどより威力は低いけど効果範囲が段違いに広い。

キン！と言う音をたてながらドンドン数を増やしながら橘に向け斬撃の雨が降り注ぐ。その斬撃はスパスパと橘を斬り裂き続ける。

「旋風」

そして最後に刹が技の名前を言うと同時に橘は倒れた。

第13話 彼女は彼を治療中！

周りは最後に刹が放った技でボロボロに成っていた。橋が立っていた場所を除き地面には無数の傷跡が走っている。その傷を見てもどれ程の数の斬撃を放ったのか分からないくらい傷ついていた。

刹は刀を鞘に戻し橋に近づく。まずは万が一を考え右手首に手を当て脈を測る。トクトク、ちゃんと動いている事を確認し朔に体を返す。

「エッ！い、痛い何か滅茶苦茶手首痛いんですけど！！ちょっと怪我はしないって言ったじゃないですか！！」

急に体に感覚が戻り橋に刀を蹴られたりしたせいで手首に痛みが走る。

（すまん。予想より面白い奴だな。ついやってもらった）

頭の中で凄い軽い感じで謝っている自分の姿が浮かぶ。それは自分のハズなのに妙にムカついた。

しかしこれ以上言っても恐らく無駄だと悟った朔は、顔を上げ辺りを見渡す。

そこであの眼帯の女の子を見つけて助けを求める。

「そこの君。助けて、ヘルプミ」

「あ、うん」

余り痛がっていない感じで呼んだ朔に彼女は急いで近づく。

「ちょっと待ってて。直ぐに準備するから」

彼女は朔から見て何も持っておらず、準備をしてみると何をも準備するのか朔には見当もつかない。

「アポーツ。NooO」

彼女が何か喋るとその手にはどっからどう見ても救急箱と分かる物が有った。

「はあ！？え、え、それ何処から出てきたの！て、言うか何時出したの！」

先程まで確かに彼女の手には何も乗っていなかった。しかし今目の前には救急箱を待っている。いったい何処から？それに何時？様々な疑問を朔は口に出す。

朔がそれを目の前の彼女に聞こうとするが、

「え〜と。ま、まあ良いでしょ！それより直ぐ治療するからジッとしてて」

若干焦りながら話を反らし、朔の治療を始める。

朔は一旦諦めジツとする。そして直ぐに思い出す。

「そう言えば。自分で言つといて何だけど、橘さんとあの男を先に治療しなくて良いの？ほら凄い傷だし。」

この場には朔より重症な者が二人いる。その事を彼女に伝えたと、

「嫌よ。あいつから逃げてたのにあいつ治療したら意味無いじゃないの。それに向こうの彼は傷口を自分で焼いてるし」

彼女の言つた通り橘を治療する意味は無いかも知れない。それにもう一人の男を見ると彼女が言つた通り傷口は塞がっていてもう血は流れていない。

（え、て言つか見えてるの！？それで！）

男の傷口を確認して今更ながら気付く。眼帯をした彼女に物が見えて居る事に。

（と言うか如何して気付かなかつたんだろう？初めっからずっと見えて無いと出来ない事をしてたじゃないか）

その間彼女は怪我の確認をしてた。そして軽く診た後救急箱からシップを出す。

「うん。これ位ならシップを貼っていたら治るハズだからこれで良いわね」

朔の手首にシップを貼りながら話かける。最初は痛がっていた朔も実際は大して痛くない。体の感覚が戻って直ぐの時はいきなり痛みが来たので通常より痛く感じたのだ。

「あ、ありがとう。え〜と何て名前？」

まだ名前を聞いていないので朔は尋ねる。

「あ、まだ言っただけ？ 私はライア。ライア＝リダイレクト。よろしくね」

「うんよろしく。ついでに俺は柚木朔って名前ね」

これがこれから長い付き合いになる二人が初めてちゃんと会話した瞬間だった

第14話 弱みを突いて交渉中！

「それでこれから如何する？」

辺りを見渡しながら朔がライアに尋ねる。ライアも辺りを見渡し腕を組んで考える。

「やっぱり逃げた方が良いかな？」

組んだ腕を解き、倒れた月蝕を指さしながら答える。

「うん。逃げた方がいいと思う。多分そろそろ月蝕の増援が来ると思うし」

橘ほどの実力者に発信機一つ位持たしているだろう。それが其処から動かなくなったら確認しに来るだろう。

それにさっきまで凄いい音を出して戦っていたので近くに居る警察も動くだろう。もし顔を見られたら確実に連行されてしまう。そうなる前に此処を立ち去らなければならない。

「よし！じゃあ直ぐにでも此処から移動しましょう！」

ライアも朔と同じ答えに至ったのか、此処から直ぐに移動することを提案する。

これを拒否する理由は朔には無い。

「分かった。行こうか」

先程自分が通ってきた道の方に歩きだす。ライアは朔の後ろに続いて行く。

「そう言えば何であの箱を盗んだの？」

基本的に朔は黙っている事があまり好きでは無い。なのでこれ以外特に話す事が無いのでライアに聞いてみた。

「べ、別に盗んだわけじゃ無いわよ。ちょっと借りただけよ！」

若干キレながら言うライアを見ながら、

（人はそれを盗んだって言うんです。まあ口に出さないけど）

口には出せない事を頭の中で言う朔。しかしちゃんと目の前のライアとの会話も続ける。

「じゃあ何で借りたの？」

「えっとそれは……言わなきゃダメ？」

答えずらそうに首を少し傾けて言うてくるその様子を少し可愛く感じてしまった自分に罪はないはずだ。

しかし此処まで巻き込まれて引き下がる訳にはいかない。

「ああそうなんだ。此処まで巻き込んだいて理由すら教えてくれな
いんだ？」

若干下を向きライアが断りずらそうなところから切り込む。

ライアもその意見には自分に負い目があるせいかな若干口籠る

「え、えつと・・・その」

「いいんだ。どうせ僕は勝手に巻き込まただけさ。だから別に気になくて良いよ」

「そ、そう。じゃあ別に」

「ああ何か手首が痛いな。後何か胸が痛いな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

胸を押さえながら軽くライアを見る。その表情はライアから見えない位置で勝利を確信している。ライアの性格は橘との交渉時に軽く把握しているのだ。

一方のライアは先程の橘との交渉時と同じくドンドン朔の思い道理の方向に落ちて行く。

「あれゝそ・う・言・え・ばゝ？あの箱って何なんだろうな？ライアさん知らない？」

その言葉がライアにはとつと言えと聞こえてきた。

そしてついにライアは諦める。

「わ、分かりました！分かりましたから責めないでよ！」

「いや、何か悪いね」

全く悪気なく謝る朔。それに溜息を吐きながらライアは喋り出す。

「実は私此処とは違う世界から来たの」

第15話 事情と今後について相談中！

「実は私此処とは違う世界から来まして」

若干ライアと距離をとり話を続ける朔。

「え、えっと此処とは違う世界？そんな事急に言われても信じられる事じゃ無い。何か証拠とかないの？」

顔を彼女と同じくらいの高さの場所に持って行き、目（眼帯）を見ながら優しく喋りかける。

その顔は老人ホームのヘルパーさんより優しそうだ。

「いやホント何だってば！」

「あ、うん。僕は信じてるよ。でもほら今後同じ事聞かれた時に同じ事言ったら多分どっか連れて行かれるよ」

（例えば病院とか）

その顔で神を信じていると言っても疑われないくらい信じていると言った雰囲気を出しながら話しかける。しかし心の中では欠片も信じて無かった。

「それで結局何で盗ん、借りたの？」

盗んだと言いかけてながらもライアに本題を聞く。しかし彼女にはしつかり聞こえていたらしい。

「だから盗んだんじゃ無いわよ！ちょっと借りただけで言うてるでしょ！」

「じゃあ何で借りたの？」

「それはこれを使えば元の世界に帰れるって聞いたから」

自信ばさげに言う彼女に何処のどいつがそんな事知ってるんだよ、
と言いたいところをグツと我慢する。

「だ、誰からそれを聞いたの？」

「えつと誰だっけ？」

その一言に朔の我慢が今日というストレスを加え爆発する。

「あんなハッキリ言わして貰うぞ！百万歩譲って異世界はまだ良い
！」

「そんなに譲ないとダメなの？」

「ちょっとは俺の話を大人しく聞け！！」

先まで使っていたエセ敬語を止め彼女に向ってビシッと指をさしながら、

「返事は！！」

「・・・・・・・・・・ハイ」

「よろしい！じゃ続きを言つぞ！異世界はまだ良い。けどな何・
処・に異世界の帰り方を知
っている奴が普通に居る！！」

「ええー！！居ないの！！」

「居るかこのミジンコ脳が！！」

「いったー！！何も叩く事無いじゃん！！」

ついライアの頭を叩いてしまいライアも怒り出す。だが今は朔の怒りの方が遥かに大きかった。

（こんなこんなミジンコ脳のせいで俺が本間燕の記憶を持っている
とばれたのか！今まで俺が何のために隠してきたと）

しかし何時まで怒っている訳にはいかない。

「クールだ頭を冷やすんだ俺！！」

自分に自己暗示をかけ落ち着いて行く。ちなみにライアはその様子を奇異の目で見ている。

そして冷静になってもう一度話を続ける。

「それで俺がその箱開けちゃったけど如何するんだ？」

「そうなんだよね。特にこれから如何するとか決まっていし？ね
え何かいい案無い？」

少し考える仕草を見せながらクルツと反転して朔にも意見を求める。

それに朔も少し考える。

（多分これから月蝕に追い駆けられるんだろうな。でももう箱は、あれ待てよもしかして俺も追い駆けられる？）

今更ながら自分が箱を開けてしまった事を思い出す。そのせいか刀を見ていると、

「あ、そうか君が箱開けちゃったんだし、あの言葉を信じるなら君に付いて行けば帰れるかも知れないんだよね！」

「え、お嬢さん正気ですか!？」

「正気よしよ・う・き！後何よお嬢さんて」

彼女は実際このままだと付いてくるだろう。しかしそれは朔としてはよろしくない。

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

「うん？何？」

「君に付いて来られたら俺が困るよ！」

「え、何で？」

「何でって」

普通に考えたら分かるでしょと言いたいのが恐らく彼女には意味が無いだろう。何せ誰に聞いた

かも分からない事で盗みに入る様な子だ。決めたら一直線だろう。

「とにかく駄目な物は駄目」

「そんな〜！じゃこれから如何すれば良いの？」

ワザとらしく倒れながら悲しそうな声で朔を見つめる。

眼帯越しとはいえその視線に怯えむ朔。だが此処で引き下がる訳にはいかない。

「俺はこれから家に帰るの！だから家に付いて来られたら困るの！」

言葉の最後を一々強調して力押しで説得しようと試みる。しかし若干？天然ばい彼女は強かった。

「じゃ泊めて！」

「……………え！！！」

可笑しい何か一瞬間こえなかった気がする。

「だから泊めてっば！」

「いやあの〜その〜お、女の子が男の家にそんな簡単に泊まるのは駄目だよ！！うん駄目だよ」

自分的に完璧な理由を彼女に出す。しかしそんなのは関係なかった様だ。

「でも親とか居るんでしょ？」

「いや居るけど」

「じゃ大丈夫でしょ！」

いったい何処からその自信が来るんだろう。そんな事を考えながら
も朔は家に帰る途中ずっと交渉を続ける。

しかし、

「ここが俺の家です」

「へーここがそうなんだ」

結局彼女を打ち負かす事は出来なかった。

第16話 玄関の前で混乱中！

「へー此処が君の家なんだ」

隣で何か言っている人を無視して朔は家の塀に背中を預け思考を走らせる。

（如何する！どうやって父さんと母さんとあいつに説明すれば良いんだ！？）

ぶつぶつ言いながらライアが家に来た言い訳を考え続ける。そこに、

「朔兄玄関の前で何やってんの？」

後ろから聞こえる聞き覚えのある声にビクツと驚く朔。

もう辺りも暗く遅い時間。そんな時間に外で騒いでいたら幾らなんでも気付かれるだろう事を今更ながらに気付く。そしてゆっくり後ろを振り向く。

自分の家のドアが開いていて其処から顔を出す12、3歳の女の子が一人。

室内とは言え今は冬で寒いのだろう、その服装は暖かそうな襟の高い白いセーターに紺のジーパンを穿いている。

如何してこんなにタイミングが悪いのだろう。手をおでこに当て空を見上げる。

言い訳を考えていたのに思いつく前に見つかるなんて、きっとこの場所が悪かったに違いないと無機物どころか場所と言うある種の概念のせいにして言い訳を始める。

「何って、何もして無いし！唯玄関の前で立ちたくなっただけだし！！」

かなり焦って居たのだろう。その言い訳は言い訳になって無く、ホントに月蝕の橋と交渉する程の人物と同じなのかと疑いたくなるくらいお粗末な物だった。

しかもよく見ると視線もあわせていない。

何時もの口調と全く違うあきらかに焦っている感じの朔に訝しげな顔を向けその隣に立っているライアに気付く。

「こんばんわ」

彼女の視線に気付いたライアが挨拶をする。

「えっとこんばんわ」

挨拶された彼女もライアに挨拶を返す。そして初めてライアの姿をちゃんと見る。

服装はあまり見かけ無いがライアに良く似合っておりこれも有りかなと思わせる。その特徴的な赤い髪もまだ良いだろう。しかし眼帯は見逃せなかった。

じつとライアの眼帯を見続ける女の子。そして急に振り返り家の中

に向かって、

「叔父さん！！叔母さん！！朔兄がコスプレした女の人を連れて来た~~~~~！！！」

大声で家に向かって朔にとって最もそうみられなかった誤解をされる。

しかも玄関のドアが開いているのだ。明日から近所の人にどう接すれば良いのだろうかと頭を抱え本気で考える。

朔が頭を抱えている間も時間は動いている。

「何~~~~~！！！」

「何ですって~~~~~！！！」

家の中からダダダツと走ってくる音と共に男性と女性の二種類の大声が聞こえる。

それを聞いた朔は己の世間体の為に一瞬でライアと女の子を家の中に入れ鍵を閉める。

「ふう。これで如何にか俺の世間体は守られ、た？」

ガシツ！と朔の両肩に手が置かれ後ろを振り返る。その手の持ち主の朔の両親はとてもいい笑顔で、

「ちょっと朔話そうか！！！」

「お話ししよう!!」

朔を引きずりながらリビングへ移動する。その途中で朔の持っている長い刀が壁に当たりながら進んでいくのがシユールに感じる。

此处には朔しか知り合いのいないライアもその後ろを急いで追いかけて行く。

そのライアを見て玄関で叫んだ女の子もその後ろに続いて行く。

引きずられながらこうなった理由を考えつい言ってしまう。

「何でこうなるんだよ〜!!」

引きずられながら叫ぶ朔の声に答えてくれる者はこの場に居なかった。

第17話 あの子について説明中！

「で、このお嬢さんは誰だ？」

リビングに入って直ぐに朔を地面に座らせ尋問する父親。隣で母親も眺めている。

朔としても早く説明してこの場から離れたいので直ぐに説明を始める。

「この子はライアって名前です今日会ったんだよ」

隣のライアに手を向けまずは名前を教える。ライアもそれに反応して、

「始めまして。私はライア」リダイレクトって言います。ライアとも呼んで下さい」

年上と言う事もあり敬語で頭を下げながら自己紹介するライアに家に居た三人は慌てて挨拶をする。

「どうも私は朔の父親で柚木雄哉と言います。そして私の隣にいるのが」

「妻の里美です」

朔が年を取ったらこんな風になるのかと思わせる渋めの男性と中学生の子供を持つようには見えない若い女性が自己紹介する。

夫婦で挨拶をしてくる二人に急いで頭を下げるライア。そして残った一人の女の子に顔を向ける。

「えっと私は柚木天音。其処に居る朔兄の従妹です」

頬を掻きながら若干照れくさそうに答える。

「あ、はい雄也さんと里美さんと天音ちゃんですね」

確認のために其々の名前を呼ぶ。呼ばれた方もそれに頷いて返す。

「それで如何してライアさんが此処に居るんだ朔？」

若干話の輪の中から外されてぶつぶつ言いながら下を向いていた朔は急に尋ねられ父親に視線を戻す。

「あの先言つとくけどこれから言う事は全部本当の事だから、取り合えず全部聞いてくれ」

自分としても信じられない話ばかりをこれから言おうとして居るのだ。なので先に釘をさしておく。

「・・・・・・・・分かった。最後まで話をちゃんと聞こう」

父親が返事をしたのを確認して話し出す。

「最初は何時もうり追いかけられていたんだ」

「いや待ってよ朔兄！何時もうり追いかけられてたってどんだけなのさ！！」

始まって速攻で突っ込んでしまう天音。その隣で父親も突っ込みかけていた。残る二人は片方は呆れ片方は取り合えず笑っていた。

「だから話を聞けって！」

「いや無理でしょ！！何か凄く突っ込み所がありそうな気配するんですけど！！！」

朔が聞くように言うが、全く時間を開けずに突っ込みが入る。確かに始まりの時点であれなのだからその後もあまり期待はできないだろう。

「いいからそれでも一旦全部聞け！！」

「わ、分かったよ！だからそんなに怒鳴らないでよ」

怒鳴られ少し怯んだ天音は取り合えず聞こうと努力する。

「じゃ続けるぞ。追いかけられそれから逃げ切りまた追いかけられとそれを繰り返していた俺は路地裏に逃げ込んだ」

あんたはいつたい何回追いかけているんだと突っ込みたい気持ちを我慢する天音。自分の左手で右手を思いつき押さえつけている。

しかしそれに気付かない朔は話を続ける。

「その後ろから能力者の男が追って来ていてな。逃げていた俺が角を曲がった先でライアと真つ黒な服を来た奴らが居たんだ」

（ライアさん貴女ですか！？貴女も何ですか！！？）

心の中でライアもかと突っ込むが現実では我慢する。

「それで俺は隠れてたんだが俺を追って来ていた奴が見つかったな。そいつに向けて攻撃してきたんだが攻撃されたそいつがキレて服を燃やしたんだ」

（そんな人に追いかけてたの！！）

「そしたらそいつ等が着てた服が見えてそいつ等が月蝕の人間だつて知って叫んじゃって」

（月蝕って世界機関じゃ無かったっけ！？）

「その後何だかんだあつて一人を除いた全員を倒したんだけど、残った奴があきらかに勝てない相手で交渉してたんだ」

（全員倒したつてどんだけなの！！）

一回一回律儀に心の中で突っ込むが話をちゃんと聞く天音。残りのライアを除いた二人も我慢している。

「それであいつ等狙っていた物を渡そうとしたらこいつが出てきて自分の持っている二メートル程の刀を前に出す。

「これって本物!？」

今まで心の中でだけで留めていた物をついだしてしまう天音。急に目の前に二メートルもある本物の刀を出されたのだそれも仕方ないのかも知れない。

「ああ本物だ。ほら」

刀を少しだけ鞘から出しそれを見せる。その刀身は光を反射し素人から見ても偽物には見えない。

「あわわわわわ!!!!!!」

軽く触って直ぐに手を放す天音。その様子を朔とライアは苦笑いで見ている。

「もう良いな?じゃ続けるぞ?」

「う、うん」

「刀が出てきて直ぐまたあの能力者に襲われたんだ。いろいろあつてこの刀を使って倒したんだけど」

「だけど?」

「うん。まあ今回あまり関係無いから良いよ。その後も何だかんだで橘さんあ、月蝕の人ね。その人を倒して帰って来たって訳」

何か色々端折られた感じがするが重要な疑問が一つ残った。

「ねえ？結局ライアさんは何で来たの？」

朔は言いにくそうに家族の方を見る。

「まあそれは何と言うか？ライアこの世界の人じゃ無いらしいんだよ」

「……………いちよう聞くけどホント？」

「うん。らしい」

その場に妙な沈黙が走る。だがまだ続きを聞かなければならない。

「それで何で異世界の人が家に来たの？」

「それがこの刀が自分の世界に戻るカギらしくて」

そうなのつと視線でライアに尋ねる。

「はい。今のところそれ以外の手掛かりが無くてですね？それで出来れば暫く此処でお世話になりたいんですけど？」

朔の両親の顔を見て頼みこむ。それに断わってくれと心の中で願いながら朔は返事を待つ。

「その朔の持っている刀を渡してサヨナラって言つのは可哀そうだし。此処には知り合いは居ないんだろっ？」

「はい。全く知らない所ですから」

両親二人は少し話し合い結論を出す。

「幸い部屋も余っているしこんな所で良ければゆっくりして行くといい」

「あ、ありがと御座います!!!」

ガバツと頭を勢いよく下げお礼を言う。その横で朔は頭につき、それを見た天音が尋ねる。

「如何したの朔兄？」

聞かれた朔は嫌そうに、

「いや何か嫌な予感がするんだよね」

今後の自分が何かに巻き込まれる事を予想する。

第18話 部屋に移動中！

「取り合えずお話は終わりにしてご飯にしましょうか？」

立ち上がって両手を合わせながら里美がそんな事を言った。今日色々あった朔もお腹が空いておりそれに異論はない。

「母さん俺もお腹空いたから早く食べたいんだけど準備できてるの？」

聞かれた里美も少し考える仕草を見せ、

「そうね・・・後十分位で出来るわよ」

だいたいの時間を朔に教える。

「じゃ朔と天音ちゃん。その間に彼女を部屋に案内してあげてくれ」

ライアがこれから暫く居るであろう部屋に案内するよう朔と天音に言った。

「分かった」

「分かりました。じゃ行きましようかライアさん」

朔は刀を持って立ち上がり、天音も立ち上がってライアを連れて行く。その時天音はライアの目が見えてないと思ったのか手を引っ張って行く。天音に手を掴まれたライアも何となく理解しているのか廊下に出てから話しかける。

「あの～天音ちゃん」

「はい何ですか？」

呼ばれた天音はライアの方を向き首を傾けながら返事をする。その様子が見えるライアは少し笑いながら、

「別に手を握らなくても見えているから大丈夫だよ？」

言い聞かせるように優しく天音に教えるライア。隣の朔も始めは同じような事を思っていたため苦笑いしながら見ている。

「ええ～！あの～その～み、見えてるんですか！？」

「うん。結構ちゃんと」

「ご、御免なさい！！眼帯そんなのしてるから見えないと思って」

パツと手を放し頭を下げる天音。頭を下げられたライアもそれが善意と分かっているので自分より背の低い天音の顔の高さに合わせ話しかける。

「別に謝らなくて良いよ。だって良かれと思ってしたんでしょ？」

「はい」

「なら謝る理由はないよ」

優しく笑いかけ天音を見る。その顔を見た天音も笑顔で答える。

（何かメツチャ居ずらないか此処）

一人途中からおいて行かれた朔としては居ずらい事この上ない状況だった。

「あ、あのそろそろ行きたいんだけど？」

何時までもこのままだと俺は空気になると感じた朔は思いきって話しかける。

ライアと天音も朔の事は覚えていたらしくまた歩き出す。

「それで空いてる部屋何だけど、二階への階段を上った突き当りの部屋になるから」

歩きながら部屋のある場所をライアに説明する。話を聞いていたらイアも朔に頷いて返す。

途中で階段を上り突き当りの部屋を目指す。

「ちょっと待っててくれないか？」

「え、何で？」

「いやこの刀をずっと持つとく訳にはいかないし」

自分の持っている刀を軽く見せそのまま自分の部屋に入っていく。

「じゃ行こうか」

それから十秒もしないうちに出てきてまた歩き出す。

「この部屋だよ」

朔の部屋から歩き始めて直ぐ目的の部屋の前に来てライアに教える。
ドアを開けて部屋を見渡す。少し荷物があるがわりと綺麗に片づけられており、朔から見ても特に問題はない部屋だった。

窓まで歩いて行き、窓をあけ軽く換気する。外を見ると当たりは真
つ暗で完全に夜と言って良
い位の時間帯だった。

「じゃ少し此处を片づけてから下に降りようか？」

「そうだね。ちょっと片付けた方がいいかもね」

そう言つて朔と天音は荷物を運び出す。ライアも荷物を持ち二人に
続いて行つた。

第19話 兄妹で仲良く喧嘩中？

「ご馳走様」

「「ご馳走様でした」」

今時の中学生にしては珍しくちゃんとご馳走様を言う二人と一人。

「ライアちよつと俺の部屋で話をしないか？」

上にある自分の部屋を指でさしながらライアを誘う。

「あ！私も行く」

天音もシュバツと勢いよく手を上げて二人にアピールする。結構な勢いで上げたせいかもしれない。片方の手をテーブルについている。

「安心しろお前はどうせ来ると思って最初から数に入っているよ」

朔もその天音にハイハイと言った感じで軽く頭をパシパシ叩きながら答える。頭を叩かれている天音も特に気にせず数に入っていた事を素直に喜ぶ。

ライアもその二人の様子を見て微笑ましそうに笑う。

「あゝこんな事してる場合じゃ無くてな。まあ取り合えず俺の部屋に行こうと思うんだけどいいか？」

天音の頭の上に手を置いたままニコニコと笑っているライアの方を
向き確認を取る。

「うん。私は良いよ」

「じゃ行くか」

返事を貰った朔は天音から手を放し階段に向かって歩き出す。

急に手を放された天音は少しふらつくが直ぐにスリッパをパタパタ
鳴らしながら朔を追いかける。

ライアも残った二人に頭を下げ少し早歩き気味に追いかける。

三人はトントンと階段を上り朔の部屋に着く。

「まあ入ってくれ」

ドアを開けながら二人を中に入れ様とすると、

「じゃお邪魔するね」

「朔兄の部屋何だから、そんな事一々言わなくて良いってば!」

「ちょっとこっち来い天音」

「えっ! いや遠慮したいかな?なんて」

「何遠慮するな」

遠慮するライアに天音が余計な事を言っただけに呼び出される。己の失言を悟った天音もそれを回避しようと試みるが、逆に朔が近づいて来る。それから逃れる様に一歩二歩と後ろに下がるがバン！と壁に直ぐぶつかり退路を断たれる。

助けを求めようとライアにサインを飛ばすが、すでにライアは朔の部屋に入っておりそれに気付く事はない。

「準備はいいか？まあ返事は聞いて無いけどな」

ガシッ！と頭を掴み力を込める。

「痛い、痛い痛い滅茶苦茶痛いから！！！」

頭を掴んでいる指先からミシミシと聞こえそうなぐらい力を込められ悲鳴を上げる。余りの痛みに涙も浮かんでいる。

だが何時までもそうしている訳にもいかず手を放す朔。手を放された天音はしゃがんで痛む頭を掌でなでる。そして涙を浮かべたままキッ！と上目使いで睨み付けるが、全く怖くないどころか少し可愛いと思ってしまう朔。

「御免御免。ちょっとやりすぎた」

涙目で見られ良心が痛んだ朔は頭を撫でながら天音に謝る。

「ちよつとどころじゃ無いよ！凄く痛かったんだから！！！」

頭を撫でられながら怒るが、今一迫力に欠ける。

「話は良いの？」

朔の部屋のドアから顔を覗かせながら二人を呼ぶライア。

「あ、御免今すぐ行くよ！行こうぜ天音！」

手を差し出し「ヨッ！」と声を出しながら天音を引っ張り上げる。

「わっ！」と天音も驚くが直ぐに持ち直し、

「もう！仕方ないな朔兄は」

何時も道理何だかんだ天音は朔を許し一緒に部屋に入って行く。

第20話 こっちに來た理由を説明中！ 前編

「悪い！少し待たせちまつたな」

部屋に入って直ぐにライアにパン！と手を合わせながら少し頭を下げて謝る。隣の花音も一緒に頭を下げています。

兄妹揃って頭を下げてくる二人を見てクスクスと笑ってしてしまうライア。笑われた二人はお互いの顔を見合わせてその後ライアを見て同時に首を傾げる。

「いや二人とも仲良いな〜て思ってたさ」

首を傾げたまま此方を向いている二人に楽しそうに説明する。

教えられた二人も恥ずかしくなって、お互い意識して少し距離を取る。

「あゝゴホン！じゃ話をしたいから二人共其処のベッドにでも座ってくれ」

恥ずかしくなった朔は、一度わざとらしく咳一回してベッドを指さしながら自分は部屋にあった椅子に座って話しはじめる。

急に話を替えられてキョトンしていたが、朔が椅子に座ったのを見て二人は並んでベッドにポスンと座る。

「さっき言ったと思うけどライアに話が有るんだ」

「ん？何かな？」

片腕を軽く机に置いて朔はライアに話かける。ライアもそれに疑問で返す。

「少し気になった事があってライアに聞きたいんだけど……..
良いかな？」

自分で呼び出したのだが答える側のライアに確認を取っていないので確認を取る。

「……うん分かった。答えられる事なら答えるよ」

朔の目から真面目な話である事を感じたライアはあまり考えずに頷く。

「ありがとう」

意外とあっさり頷いてくれたので朔もライアにお礼を言う。

「うん。別にいいよ」

「じゃ聞くけどライアはどうやってこの世界に来たんだ？」

話を聞いた時から気になっていた事があった朔は思い切って問いかける。ライアと一緒に座っている天音も横でライアを見ている。

「えっと……こっちに来たのは多分だけど」

「「だけど？」」

二人揃ってライアに先を促す。その動きはシンクロと言って良いぐらい揃っている。

「ドアだと思う」

「「ドア？」」

またも揃って聞き返す二人。これが真面目な話でなければライアも笑ってしまっているであろう動きだ。

「うん。ドア。実はこっちに来る前に私はソル族っていう人達とカグヤ遺跡って言う場所の調査をしてたんだ。あとソル族って言うのは私の世界の古代遺跡を解明している流浪の民ね」

「そうなの？」

「うん。それが私の仕事だからね。それでソル族が見つけたカグヤ遺跡は今までにない遺跡だったんだ。まず作りが違うしある場所も可笑しかった」

「何処にあつたんだ？」

「砂漠の崖と海の崖って呼ばれてる場所の下三キロの位置にあつたんだけどそこは酷い場所だった。西の崖からは砂が落ちてきて東の崖からは滝の様に海水が落ちてくる。到底こんな場所では文明が出来るほど発展する様には私は思えなかった」

その時を思い出すかのように上を向きながら軽く手を広げ目を閉じ

話すライア。それを朔と天
音の二人も真剣に聞く。

「だけど其処にあつた遺跡は唯の遺跡じゃ無かつた。そこは今ある
技術を明らかに超えている遺跡だったんだ」

第21話 こっちに來た理由を説明中！ 後編

「歴史を紐解いても載っていないそこは五百年ぐらいは放置されていた筈なのにまだ動力が生きているどころか全くと言って良いぐらい風化していなかった。この世界の技術なら出来るかも知れないけど、私達の世界には科学って言う物はないしね」

科学が無いという事は、この世界に生きている朔と天音には想像も出来ない事だった。今暮しているこの家も電気が無いとご飯を作ることにすら苦労するだろう。

「でも海水が落ちてきているのに風化しないなんて事あるのか？」

風化とは日光や風雨にさらされることによりどんどん破壊されて変質していくことだ。その場所なら日光は殆ど当たらないかも知れないが、常に海水が淹の様に落ちて来る所で防げるとは思えない。

ライアもそれが解っているらしく一度頷く。

「うん。だから私達はそこが未知の技術で出来ているとしか言えないんだけどね」

「・・・・・・・・・・」

少し考える様に顎を掴んで下を朔。

「じゃ話を続けるよ」

その間もライアは話を進める。

「そこに私とソル族の人と五人一組でバラバラに探索してたんだけど、周りは私達の知らない技術ばかりで殆ど何か分からなかった。だけど遺跡を調べる事に対して誇りを持っているソル族は諦められなかったんだ。私達は今まで使い方が分からなくて殆ど触ることすら躊躇した物を集中的に調べた。でもやっぱり私達はその時点で諦めるべきだったんだよ」

その時起きた事を思い出し少しづつ声が小さくなっていくライア。ライアの隣に座っている天音も心配そうに見ている。

「如何なったか聞いて良いか？」

「っ！？ち、ちよつと待つてよ朔兄！！」

ライアの顔を見ながら朔は問いかける。天音がその朔を止めようと前に出ようとするが、

「大丈夫だよ天音ちゃん」

「でもいいの！！言い辛い事なんでしょ！？」

「どちらにしろこれは最後まで話さないといけないと思うし」

ライアが天音の手を掴んで動きを止め、説得する。

「・・・・・・・・分かった」

ポスン！とベッドに再び座る天音。ライアもそれを確認して話を続ける。

「二週間ぐらい私達はそれを調べていたんだ。その度にドンドン深く深く入って行ったんだけどある時誰かが防衛システムに引っ掛かったんだ。そこからはホントに酷かった。周りの壁が開いてそこから改造強化されたばいゴレームが何十体も出てきたんだ。そこから逃げ様として皆バラバラに逃げたら私は知らない部屋に着いたんだけど、その部屋は周りに何もない部屋でその真ん中にドアが一つだけあったんだ。まだゴレームに追いかけていたんだけど私はそのドアが凄く気になってつい開けちゃったら」

「この世界に来ていたって事、か？」

此処まで来たら先が分かった朔が言葉を引き継ぐ。

「うん」

ライアもそれに軽く頷いて返す。

「そのドアは何処に行ったんだ？」

来た筈ならまだドアはある筈と思いライアに問いかける。

「分かんない。私も直ぐに戻ろうとして後ろを見たけどドアはもう無かったんだ」

「・・・・・・・・それって何時の話だ？」

少し考えその話が何日前かを確かめる。

「三日ぐらい前だけどそれが如何したの？」

首を傾げながら尋ねられた事を答えるライア。その答えを聞いて朔は目を閉じ考えを廻らせる。

（三日でそんな運良く帰り方の話を聞ける物なのか？）

「やっぱりライアに帰り方を教えた奴はもう一つの世界を知っているところかどうやって来たかも知っていると思っただろうな」

小さな声で考えていた事を途中から声に出す朔。

「朔兄何か分かったの！？」

その声を天音が聞いていて、朔に質問する。

「……多分だけだな。ライアに帰り方を教えた奴もライアと同じ世界の奴だと思っ。それもこつちと向こうを行き来できるぐらいの」

第22話 朝から騒動中！

ピピピ・・・ピピピ・・・ピピピ・・・ピピ、カチ。

「んゝはあゝ」

頭の上あたりで鳴っている目覚まし時計を止めて腕を伸ばした後、溜息を吐きながら目を覚ます朔。

一分程焦点の定まらない目でボゝとした後ノロノロと服を脱ぎ始める。

「うゝ寒ゝ。とつとと着替えよ」

冬の寒さに体を震わせながら壁に掛けてある学校の制服に手を伸ばし、黒のズボンを通きワイシャツに手を通す。その状態でネクタイとブレザーを持ってドアに向かって歩いて行く。

階段を一段一段降りながらブレザーを左手にかけてネクタイを歩きながら締める。

「おはよう天音」

「朔兄おはよう！今日はちよつと急いだ方がいいと思うよ」

階段を下りて直ぐ、もう学校の制服を着ていた天音に挨拶をする。天音も朔に気付いて挨拶を

返ししながら腕に付けている時計を見せて注意して来る。

「えつとゝ7時15分。何だまだ大丈夫じゃないか」

時計の時間を読み上げながら確認して天音を見る。

「はぁ。今日は集会があるから早く来るようにって担任の先生に言われなかった？」

朔に向けてあからさまな溜息を吐きながら説明する。

「・・・そう言えば言われた様な気がする」

昨日の出来事が強すぎて忘れていたが、確かにそんな事を言われた事を思い出す。

「だから早くご飯食べた方が良いと思うよ」

「ん。分かった。ありがとうな」

天音にお礼を言って台所に向かって歩きだす。天音も後ろでトントンと音を立てて階段を上って行く。

「おはよう。母さん」

少し歩いた先のドアを開けてキッチンに立っている母親に声をかける。

「おはよう。朝ごはんはパンで良い？」

うんと軽く頷いてから食パンを受け取りトースターに入れる。

「朔君少し髪の毛はねてるから直した方がいいわよ」

「どうせ今から顔洗いにいくからついでに直しとくよ」

寝癖を指さしながら言う母親に軽く手を振りながら顔を洗いにいく。洗面所について鏡に映る顔を見る。其処には何時も道理の顔に少し立った髪の毛の自分が映っている。

「めんどくさいな」

グチグチ言いながらワックスを少しだけ手ですくい髪の毛を整える。少しペタペタとしてしまったが大丈夫だろうと手を洗った後、顔を洗い始める。

「っふ」

濡れてビショビショに成った顔をタオルを取り軽く拭いて思わず声が出るがこれもある種の日課だろう。拭き終わったタオルは洗濯機に放り込みゆっくり台所に向かう。

「母さん。パン焼けた？」

「1分ぐらい前に鳴ったから少し冷めてるかもしれないわよ」

跳び出していたパンを掴む。若干冷めている気がするが仕方ないだろうと納得して皿に乗せテーブルに置いてあるジャムをとりたっぷり塗る。

それを口に入れ噛み始めるが、クチャクチャと冷めて軟らかくなつたパンのせいか音が鳴る。

その食感と音に少し眉を顰めながら時間が無いので一気にパンを牛乳でゴクゴクと流し込む。

「ご馳走さま」

ご馳走さまと言った後、皿を洗い二階の自分の部屋に戻る。

「あ！おはよう。今日も寒いね」

自分の部屋の前でカチャツとドアを開けた所でライアに声をかけられる。服装は朔が修学旅行や友達の家泊まる時に使う外様の青いパジャマだ。

「おはよう。もうご飯は食べたか？」

「うん。30分ぐらい前に天音ちゃんと一緒に食べたよ」

どうやらライアは朔より早くから起きていたらしい。昨日は厄介事として嫌がったが、親が許可したのだし面倒と見ようとこの話題を振ったのだから必要無かつたらしい。

「そうか。なら良いんだけど」

「ん？」

外したといった感じで言葉を続ける朔に疑問を覚えるが、まあ良いだろうと納得する。朔の気持ちの持ち様なので実際特に問題ないのだが。

「そういえば俺と天音は今日学校だから居ないんだけど如何する？」

「うん。自分で少し探してみようと思ってるんだけど・・・いいよね？」

朔が質問した事に確認を取るライア。

「いや別にいいけど・・・一々確認取らなくてもいいよ」

自分の事なのでわざわざ朔に確認を取る必要は全くないのだが聞かれたからにはと笑いながら答える。最後にチョットした意見を付け加えたが。

「其れじゃ悪いけどあんまり時間が無いからそろそろ行かせて貰うよ」

「あ！ごめんね。邪魔しちゃって」

良いよと手を振りながら自分の部屋に入る。

入って直ぐに机の上のケータイと財布をポケットに突っ込む。時間を見るとすでに45分もうあまり時間は無い。

直ぐに鞆を持って一階の台所にお弁当を貰いにかけだす。

「母さんお弁当持っていくよ」

黄色い入れ物に入ったお弁当を持って玄関へ向かう。其処には既に天音が靴を履いた状態で待っていた。

「もうあんまり余裕ないよ」

時間が無いと言いつつ待ってくれる天音に感謝しながら、

「ごめんごめん。じゃ行くか！」

「うん」

「「いつてきます」」「」

声を出し二人揃って学校に向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7526g/>

絶賛逃走中！

2010年10月10日06時07分発行